

3.2 収穫調査との整合

国有林において実施された収穫調査データを用いて、現行の国有林の収穫予想表と比較することで妥当性の検証を行った。使用したデータは国有林内で実施された収穫調査野帳データを用いた。

収穫調査は、国有林野の立木売り払い、譲渡、内部的利用の目的を持って、定められた調査規定に基づき、現地にて必要な調査を実施するものである。

3.2.1 収穫調査データの整理

収穫調査データのうち、スギ、ヒノキ、カラマツ各樹種の材積合計が林分全体の 80%以上を占める林分のみを抽出した。

なお、収穫調査データには下層木も含まれるため、収穫予想表で用いられる上層木平均樹高と傾向が異なる懸念がある。そのため、胸高断面積での重み付けにより上層木平均樹高と近い値を示す Lorey's height (5.2.3 章に後述) を樹高として用いた。

3.2.2 現行収穫予想表との整合性

現行収穫予想表の地域別に収穫調査データの樹高一胸高直径関係をプロットし、さらに現行収穫予想表を重ねて現実林分との乖離度合を確認した。樹種ごとの比較結果を示す(スギ: 図 3.6、ヒノキ: 図 3.7、カラマツ: 図 3.8)。

樹種・地域により差異は見られるものの、おおむね、収穫調査結果の樹高の方が、現行の収穫予想表よりも高めとなる傾向が見られた。カラマツでは、024 番(千曲川上流・下流、中部山岳、伊那谷、木曾谷の長伐期または複層林施業)、119 番(宮・庄川、飛騨川、長良川、揖斐川、木曾川、尾張西三河、東三河)で、収穫予想表の方が過大評価となっている傾向がみられた。

高齢級では収穫調査結果の樹高で落ち込みが見られた。これは、地位が低く成長が悪い林地が伐採されずに残されてきたため高齢級化している状態が現れている可能性がある。

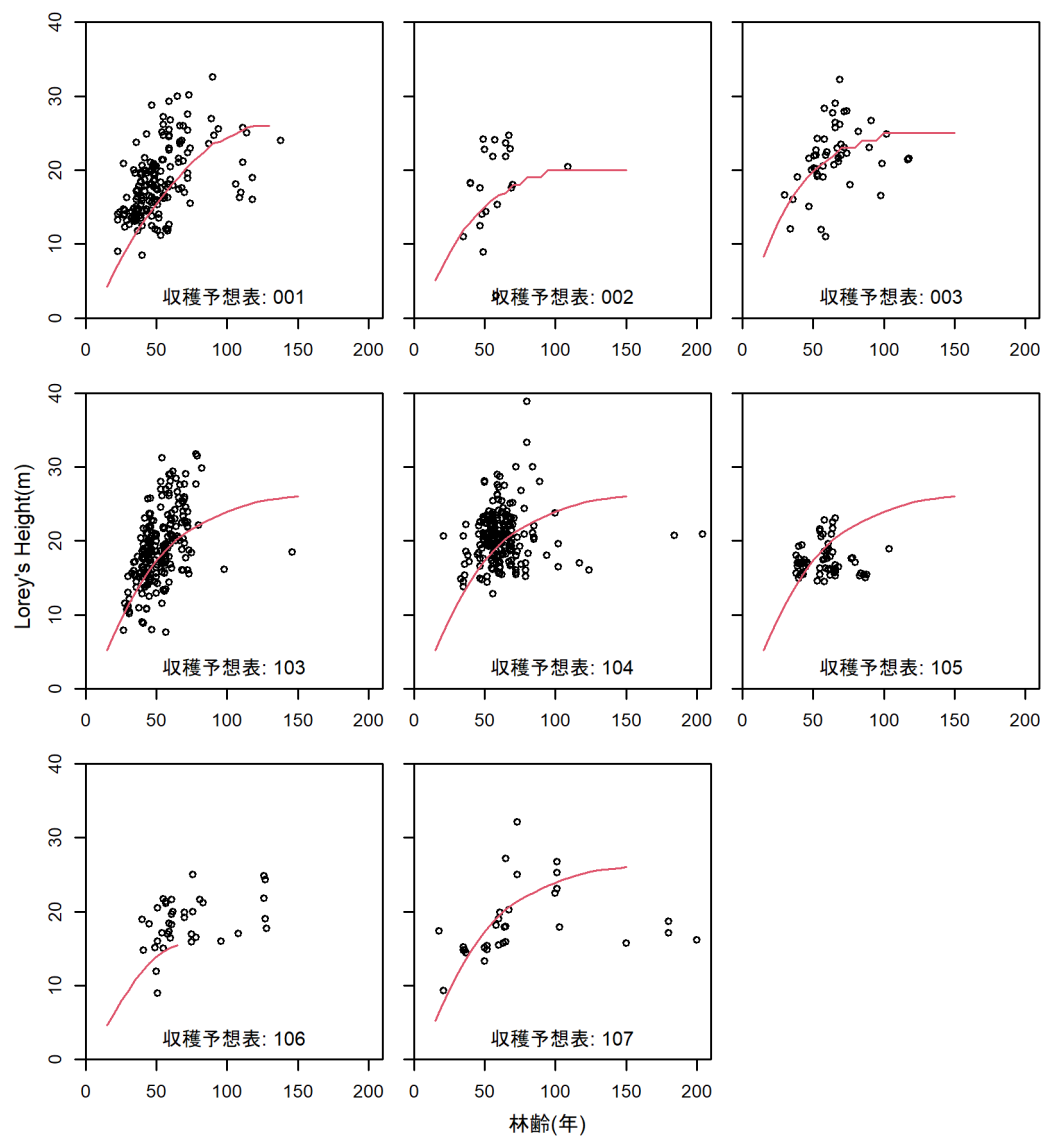


図 3.6 収穫調査結果と現行収穫予想表の比較(スギ)

※収穫予想表番号 103, 104, 105, 107 は H27.6.19 以降、109 の数値を引用

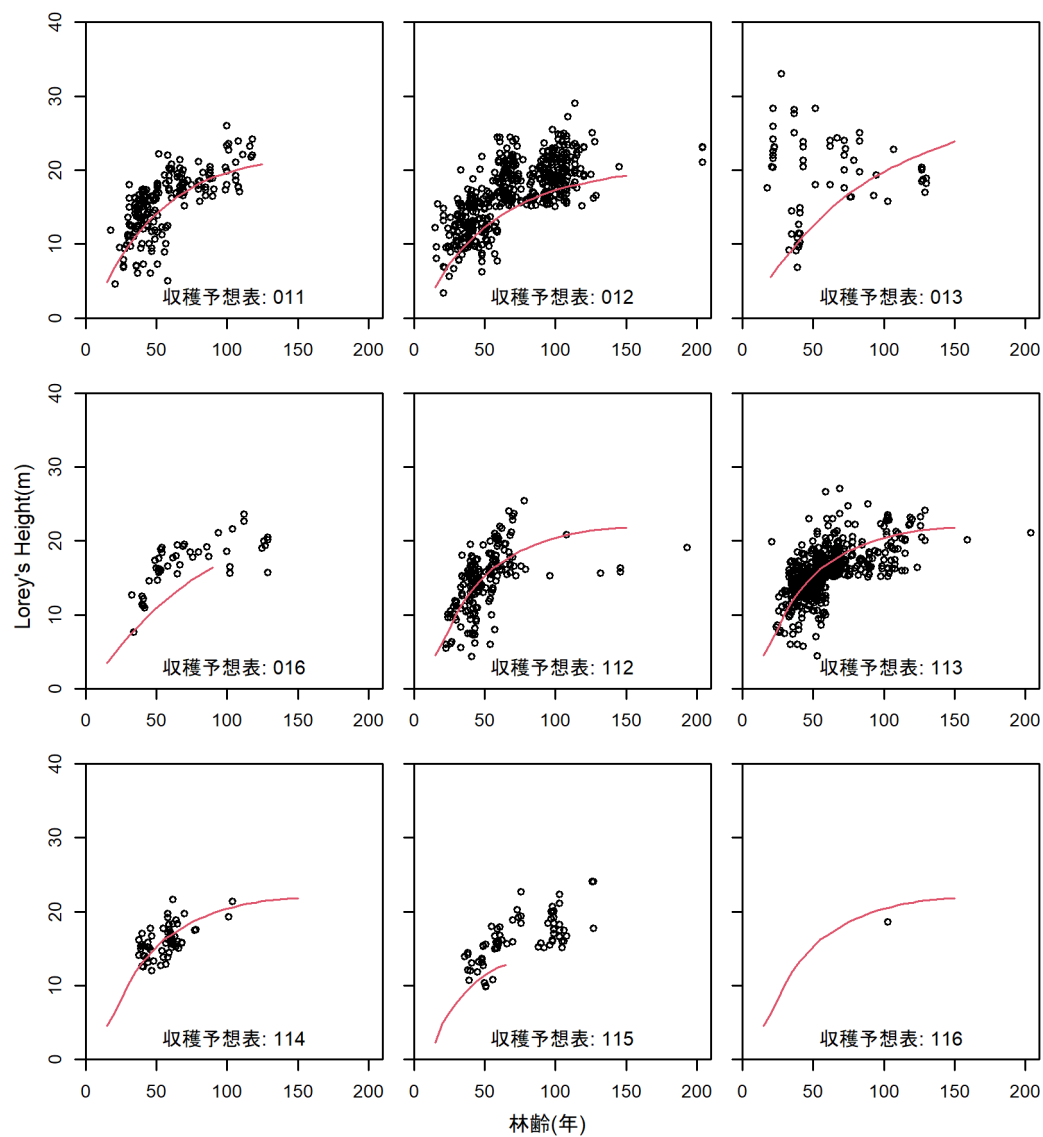


図 3.7 収穫調査結果と現行収穫予想表の比較(ヒノキ)

※収穫予想表番号 112, 113, 114, 116 は H27.6.19 以降、117 の数値を引用

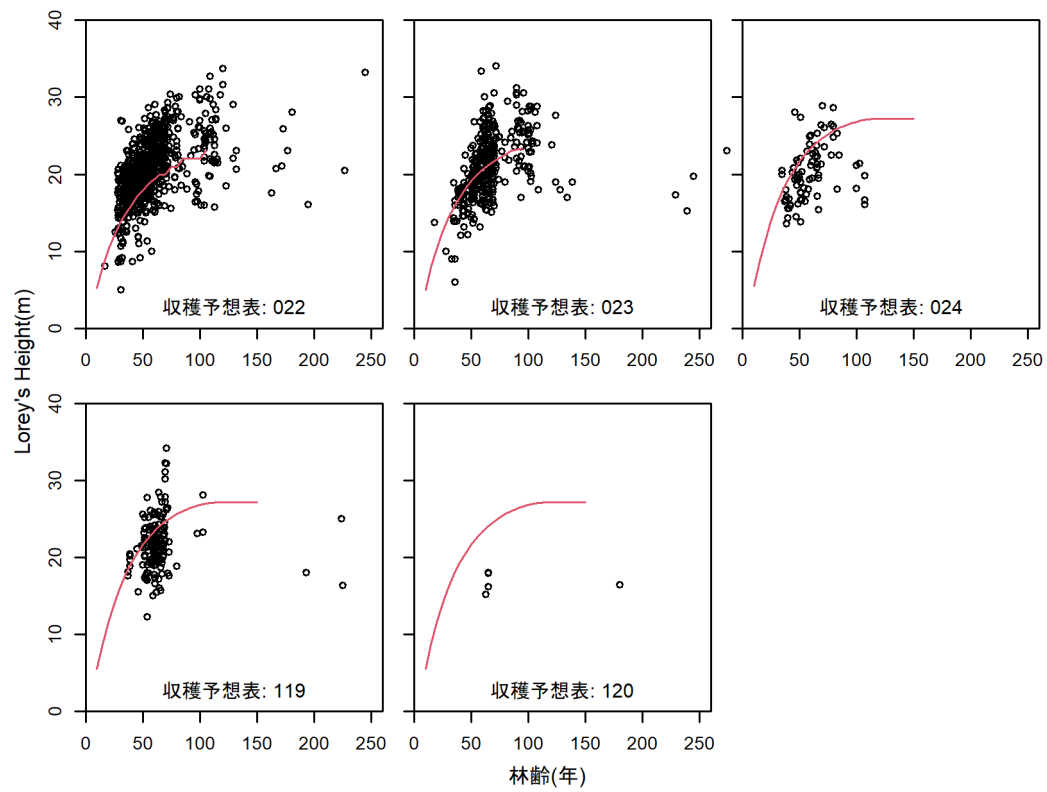


図 3.8 収穫調査結果と現行収穫予想表の比較(カラマツ)

※収穫予想表番号 119 と 120 は H27.6.19 以降、024 の数値を引用